様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４４０１０１７

研究課題名（和文）世俗化する欧州社会における看取りの思想的な拠り所の究明

研究課題名（英文）Searching for Philosophical Foundations of End-of-life-care Practices in Secularized European Societies

研究代表者

竹之内　裕文（Takenouchi, Hirofumi）

静岡大学・農学部・教授

研究者番号：９０３７４８７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はスウェーデン、ドイツ、英国、フランス、イタリアを手がかりに「欧州社会」における「世俗化」と「医療化」の現状から出発した。とはいえ「世俗化」と「医療化」は、宗教、家族、社会制度、儀礼等のあり方に応じて各国で多様な様相を呈しており、安易に一般化できない。そこで欧州緩和ケア協会の取り組みを糸口に、ホスピス・緩和ケアの歴史的な歩みを確認し、そのうえで各国における緩和ケアの現状とその歴史的背景について調査した。さらにホスピス・緩和ケアの「ルーチン化」「世俗化」「制度化」の起源を見定めるべく、ホスピスケアのパイオニアであるC. ソンダースによる終末期ケアの実践とその思想的な拠り所について論究した。

研究成果の概要（英文）：In this research, we started with the question, if and how "European societies" such as Sweden, Germany, Britain, France, and Italy are "secularized" or "medicalized". However the trend towards "secularization" and "medicalization" is various in accordance with such major factors in background as religion, family, social system, and courtesy and therefore not easily generalized. This is why we first took a general view of the hospice palliative care development in Europe, focusing on the preceding projects of the European Association for Palliative Care. Then we investigated the introduction and the subsequent development of palliative care in European countries. Finally we came to examine end-of-life care practices and their philosophical foundations of Cicely Saunders, so as to form a clear view of the question, if it is possible to trace "routinization", "secularization" or "institutionalization" of hospice palliative care to its own origins.

研究分野：哲学　倫理学　死生学

キーワード：ホスピスケア　緩和ケア　世俗化　医療化　宗教ケア　スピリチュアルケア　good death

１．研究開始当初の背景

本研究は、日本のホスピス・緩和ケアの現状にかかわる以下の問いから出発した。

看取りは、a）死（death）と死にゆくこと（dying）に直接かかわるケアであり、b）死にゆく者と遺される者との共同行為と特徴づけられよう。b）の特徴に応じて、終末期ケアにおいては、死にゆく者、看取る者、両者を支えるケア専門職の「関係性」が大きな位置を占める。他方で a）の側面を踏まえれば、看取りという共同行為に与る者の死生観がクローズアップされる。日本の終末期ケアの実践と理論においては、しかし、看取りの関係性とその社会的・経済的基盤が注目を集めてきたのとは対照的に、死生観とその文化的・宗教的背景という問題が軽視ないし敬遠されてきた。

こうした傾向は、高度成長期以降の社会変動に根ざした「死生観の空洞化」とともに、各種ケア理論・技法の国外からの移入により拍車をかけられた。米国をはじめ、文化的・宗教的背景を異にする社会から、当の背景を捨象するかたちで、各種の実践と理論が「輸入」されることにより、包括的枠組みを欠落したまま、断片的・対処療法的なケア実践が続けられてきたのである。

以上のような現状は、たんなる「輸入」を超えて、当該国・地域の文化的・宗教的背景にまで踏み込み、終末期ケアの実践的基盤を明らかにする研究を要請する。なかでも欧州諸国は、それぞれの文化的・宗教的な多様性に応じて、終末期ケアが多元的な様相を呈しており、米国スタイルに一元的に定位する現状を検証し、改善する足がかりを与えてくれるという見通しが立つ。

当該課題をめぐって申請者は、欧州の多くの研究者・実践者（ケア専門職や宗教者）と討議を重ねてきた。それを通して共同体・社会の「世俗化」という問題が、ケア実践の重要な背景として浮かび上がってきた。その程度や形態は異なるにしても、社会の「世俗化」は、欧州で広く共有された課題であり、それは各種の社会統計によっても裏づけられる。伝統的宗教はもはや精神的支柱とはならない、にもかかわらず多くの人びとは、それに替わる精神的な拠り所を見つけられずにいる。

こうした社会状況は、ホスピス・緩和ケアの変質――近代ホスピス運動の推進力となった宗教的エートスと共同体的な志向性が失われ、「医療化medicalization」と「官僚化bureaucratization」が進む事態――に深い影を落としている。欧州諸国における看取りの思想的な拠り所が、社会そのものの「世俗化」という背景から読み解かれる所以である。

２．研究の目的

ホスピス・緩和ケアの現場では、初期の運動を特徴づけた宗教的要素が失われ、それとともに医療制度への組み込みが進行していると指摘される。このケアの「医療化」を読み解く背景として、本研究は、「世俗化」――政治をはじめ、社会の諸領域が宗教的権威から離脱していく――という近代社会の動向に着目する。じっさい欧州各諸国では、社会の世俗化の様相に応じて、終末期ケアが多元的な展開を示している。

こうした見通しのもと本研究は、欧州のケア専門職を主な対象に現地調査を実施し、看取りに携わる当事者の理解を糸口に、当の実践の思想的（哲学的・宗教的）な基盤にアプローチする。世俗化する欧州社会では、なにを拠り所として、人間に課せられた死すべき定め（mortality）が共に受けとめられているのか、その見通しを足がかりに、「世俗化」と「医療化」の時代における終末期ケアのあり方について展望と指針を獲得すること、それが本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究では、「世俗化」と「医療化」との相関関係を焦点に、欧州諸国における多様な

看取りの実践が探査され、その思想的な拠り所が討究される。この目的を達成するためには、A）医療・看護実践に内在的な視座、B）社会科学的アプローチ、C）哲学的・思想的まなざしがいずれも不可欠であり、本研究はこのチーム編成を基本単位として進められる。そのうえで（1）各専門分野での文献研究（看護学、保健学、社会学、宗教学、地域研究、生命倫理学、死生学、思想史、哲学・倫理学）を基礎にして、（2）欧州諸国で看取りに携わる専門職・研究者を対象に現地調査を進める。ただ担当する言語圏・文化圏や専門分野の壁を超えて、統合的な視座を打ち立てるためには、徹底した討論の機会が要請される。これを踏まえて、(3)国内での定期的な研究会(年4 回ほど）と、（4）欧州の調査先での合同研究会を開催する。さらに研究成果を公開・還元すべく、（5）学会のシンポジウム企画等に積極的に応募し、最終的に（6）共著の公刊を目指す。

４．研究成果

本研究は、北欧諸国（とりわけスウェーデン)、ドイツ、英国、フランス、イタリアに手がかりを得ながら、まず「欧州社会」における「世俗化」と「医療化」の動向にアプローチした。

それによれば欧州各国における「世俗化」の動向は多様であり、その背景には、当該社会における宗教・宗教者の位置づけ、家族のあり方、制度、儀礼等のあり方が控えており、安易な一般化は許されない。そこで、主な研究対象とした欧州各国について、緩和ケアの導入の経緯とその後の発展を調査することで、比較研究のための共通の地盤を獲得することにした。

欧州諸国におけるホスピスケアの導入は、St. Christopher’s Hospiceの創設（1967年）に端を発する。それ以降の10年間で、英国に14のホスピスが設立される。それに続いてスウェーデン（1977年)、イタリア（80年)、ドイツ（83年)、スペイン（84年)、ベルギー（85年)、オランダ（91年)、ルーマニア（92年）でも、ホスピス・緩和ケアが導入される。

各国のホスピス・緩和ケアの特徴も、ローカルなコミュニティ志向（英国)、ボランティアや宗教の役割が限定的（スウェーデン)、宗教と市民社会の強い影響のもとでのコミュニティ志向（ドイツ)、医師主導によるヘルスケアシステムとの連動（スペイン)、英国モデルを採用しながらも、ボランティア意識の希薄な文化に適合的（ルーマニア）というように多様である。

欧州におけるホスピス・緩和ケアの展開を全体として捉える視座からは、EAPC（the European Association for Palliative Care)の設立（1981年）が注目される。これを契機に欧州諸国は、欧州全体に緩和ケアを普及・発展させる協働に着手するからである。

ホスピスケアの歴史的な変位に着目すれば、1985年前後を境に、運動として出発したホスピスケアがヘルスケアシステムの主流に組み込まれていく。それとともに「ホスピスのルーチン化」(Nicky James and David Field1992）や「ホスピスの理念の世俗化」（Ann Bradshaw1996）といった問題が提起され、広く反響を呼んできた。

以上のような変移は、ホスピス・緩和ケアの「世俗化」や「医療化」として、本来の理念からの逸脱と捉えられるものだろうか。この問いとともに、本研究は、近代ホスピスケアの創始者 C. ソンダースの取り組みに遡源することになった。

それを通して明らかになったことは、第一に、ホスピスの宗教的アイデンティティとコミュニティとしての性格にかかわる問題は、未決のまま残されているということである。また第二に、ヘルスケアシステムへの統合を契機に、ホスピスケアは自らの理念の「一般化」を要請され、当初の価値・

理念を書き換えたと考えられる。しかも、これがホスピスケアの変質を意味するとしたら、それはソンダースその人の取り組みに内在していた可能性もある。

こうした観点から本研究は、研究協力者（海外）の一人であるD・クラークが指摘する「スピリチュアルな転回spiritual turn」に注目することになった。クラークによれば、変転する社会状況に対する意識的な応答、ヘルスケアの変転する環境に対する適応の結果として、宗教的・非宗教的見方をともに承認しようとする、より包括的・融合的な「スピリチュアリティ」概念が登場した。これを土台に緩和ケアの現場では、患者・家族に対して、あからさまに宗教的なアプローチではなく、苦しみや人生の意味や人格間のつながりなどにより広く関心を向けるアプローチが採用されているというのである。では「スピリチュアルな転回」の端緒はどこに求められるのか。前述したホスピス運動の変質と同様、それはソンダースまで溯るのか。

これらの問題については、日本宗教学会第73回学術大会のパネル「欧州社会におけるホスピス・緩和ケアの展開と宗教のかかわり」（2014.9.13.同志社大学）、第33回医学哲学倫理学会のワークショップ「欧州における「良い死」の多元性とその文化的・宗教的背景」（2014.11.23.東洋大学）、上智大学グリーフケア研究所と合同の成果報告シンポジウム「ホスピス・緩和ケアはどこから、どこへ向かうのか」（2015.3.28.上智大学）等で論究した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　34　件）

(1)浅見洋、医療における Seelsorge（魂のケア）について、北陸宗教文化、査読有、28 巻、2015、1-15
(2)竹之内裕文、死と正面からむきあう――その意義と歴史的背景、緩和ケア、査読有、Vol.24 No.2、2014、86-92
(3)竹之内裕文、死の苦しみと希望はどこに――、緩和ケア、査読有、Vol.24 No.2、2014、112－117
(4)浜渦辰二、尊厳死を法制化するとは、何をすることなのか？ ―日本とヨーロッパ３国の比較考察―、メタフュシカ、あり、第 45 号、2014、1-14
(5)竹之内裕文、死すべきものとして共に世界に住まう―復興の基本理念によせて、東北哲学年報、査読有、第 29 号、2013、111-139
(6)竹之内裕文、北欧ケアの社会的基盤と思想的拠り所－日本社会におけるケアの再構築のために、文化と哲学、査読有、第 30 号、2013、1-37
(7)浅見洋、ケアを支えるシステムについての一考察、文化と哲学、査読有、第 30 号、2013、39―56
(8)浜渦辰二、ケアの現象学にむけて ―現象学の可能性をめぐって（二）―、哲学論文集、査読有、第 49 巻、2013、109-126
(9)竹之内裕文、北欧ケアの思想的な拠り所――問いとしての「福祉」、看護研究、査読有、Vol.45,No.05、2012、450-465
(10)竹之内裕文、生命倫理学から生命環境倫理学へ――生の「現実」に応答する倫理学をもとめて、思索、査読有、第 45 号（2）、2012、321-344
(11)竹之内裕文、出会いから考える人間の死生と在宅ケア、『地域リハビリテーション』Vol.8, No.1、2012、63－66
(12)浜渦辰二、ケアの倫理と看護、シリーズ『生命倫理学』「看護倫理」、査読有、第 14 巻、2012、195-217
(13)浅見洋、グリーフケアにおける死者と

の関係について、北陸宗教文化、査読有、25、2012、91-108
(14)伊達聖伸、ライシテへの 3 つのアプローチ――マルセル・ゴーシェ、ジャン・ボベロ、ルネ・レモンの著作にみる研究動向の一断面、宗教法、査読無、31、2012、79-99
(15)伊達聖伸、ライシテの変貌――左派の原理から右派の原理へ、ソフィア、査読無、60-2、2012、106-122

〔学会発表〕（計　76　件）
(1)Shinji Hamauzu, A Comparative Inquiry into “Advance Decisions” in Japan, Germany and the UK, Medical Humanities Seminar Series Spring 2015, The Body: Health, Wellbeing and Vulnerability, 2015.02.18., University of Hull(UK)
(2)浅見洋、ドイツにおける「良い死」の多元性とその文化的・宗教的背景（ワークショップ）、第 33 回医学哲学倫理学会、2014.11.23、東洋大学（東京都文京区）
(3)福島智子、イタリアにおける看取りの現状とその文化的・宗教的背景、第 33 回日本医学哲学・倫理学会大会、2014.11.23、東洋大学（東京都文京区）
(4)浜渦辰二、ドイツにおける事前指示書の法制化の内実――自律と依存を両立させる試み、静岡大学哲学会第 37 回大会シンポジウム、2014.11.3、静岡大学（静岡市）
(5)伊達聖伸、フランスにおける自己決定とその宗教的・文化的背景、静岡大学哲学会第 37 回大会シンポジウム、2014.11.3、静岡大学（静岡市）
(6)福島智子、イタリアにおける看取り・自己決定・家族、静岡大学哲学会第 37 回大会シンポジウム、2014.11.3、静岡大学（静岡市）
(7)浅見洋、ドイツ語圏における魂のケア（Seelsorge）の展開とその現状、第 21 回北陸宗教文化学会、2014．10.18、金沢大学サテライトプラザ（金沢市）
(8)Shinji Hamauzu, Dementia as a sickness of interpersonal relationship, International conference in Norrkoeping "Life with Dementia: Relations", 2014.10.15., Centre for Dementia Research, Linköping University, Norrkoeping,(Sweden)
(9)竹之内裕文、欧州におけるホスピス・緩和ケアの展開をどう読み解くか、第 73 回日本宗教学会学術大会、2014.9.13、同志社大学（京都市）
(10)諸岡了介、「ホスピスの世俗化」言説とその背景、第 73 回日本宗教学会、2014．9．13、同志社大学（京都市）
(11)伊達聖伸、フランスの看取りにおけるライシテとスピリチュアリティの拮抗、第 73 回日本宗教学会、2014.9.13、同志社大学（京都市）
(12)坂井さゆり、スピリチュアルケアと宗教－欧州・日本の緩和ケア実践から－、第 73 回日本宗教学会、2014.9.13、同志社大学（京都市）
(13)浅見洋、ゼールゾルゲとスピリチュアルケアの間、第 73 回日本宗教学会学術大会、2014.9.13、同志社大学（京都市）
(14)諸岡了介、宗教と進化論の現在－R．N．ベラ－の所論から、印度学宗教学会第 56 回学術大会、2014．6．1、種智院大学（京都市）
(15)Sayuri Sakai, Narrative of Elderly and Families Who participated in the “Healthy Aging Class” for a Better End-of-Life, The 35th International Association for Human Caring Conference, 2014．5.26,国立京都国際会館（京都市）
(16)竹之内裕文、いのちの次元から食を問いなおす――「食の倫理」のため、第 63 回地域農林経済学会大会、2013.10.20、岡

山大学（岡山市）
(17)諸岡了介、終末期体験研究の現在、第72回日本宗教学会学術大会、2013.9.7、國學院大學（伊勢市）
(18)浅見洋、死別者と死者との関係をめぐって－Grief Care の思想的展開の一側面－、第31回医学哲学倫理学会、2012. 11.17、金沢大学（金沢市）
(19)竹之内裕文、死すべきものとして共に世界に住まう――北欧「福祉」が照らしだす課題、東北哲学会第 62 回大会、2012.10.20、東北大学（仙台市）
(20)竹之内裕文、「いのち」が語られる地平――他なるものとのかかわりをめぐって、日本宗教学会2012年度学術大会、2012.9.9、皇學館大學（伊勢市）
(21)諸岡了介、Visions of the Dead and End-of-life Care in Contemporary Japan, The 25th International Conference of the Association of North-east Asian Cultures, 2012.6.8, 中国・西安

〔図書〕（計　10　件）
(1)浅見洋　他、新教出版社、悲しみに寄り添う―死別と悲哀の心理学―、2013
浅見洋　他、北國新聞出版局、生から死を考える―新「死生学入門」金沢大学講義集―、2013
(2)竹之内裕文、丸善出版、シリーズ生命倫理学・第4巻　終末期医療、2012、126-159
(3)浜渦辰二、丸善出版、シリーズ『生命倫理学』「看護倫理」、2012、195-217

６．研究組織
(1)研究代表者
竹之内　裕文（Takenouchi, Hirofumi）
静岡大学・農学研究科・教授
研究者番号：９０３７４８７６

(2)研究分担者
浅見　洋（Asami, Hiroshi）
石川県立看護大学・看護部・准教授
研究者番号：　００１３２５９８

福島　智子（Fukushima, Tomoko）
松本大学・人間健康学部・准教授
研究者番号：６０４３５２７８

浜渦　辰二（Hamauzu, Shinji）
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：７０２１８５２７

諸岡　了介（Morooka, Ryousuke）
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号：９０４６６５１６

伊達　聖伸（Date, Kiyonobu）
上智大学・外国学部・准教授
研究者番号：９０５５０００４

坂井　さゆり（Sakai, Sayuri）
新潟大学・医学部保健学科・准教授
研究者番号：４０４３６７７０

(3)連携研究者
山本　佳世子（Yamamoto, Kayoko）
上智大学・グリーフケア研究所・研究員
研究者番号：１０６２５４５５

齊藤美恵　(Saitou, Mie)
西武文理大学・看護学部・講師
研究者番号：８０６４８１１３

田代志門　(Tashiro, Shimon)
国立がんセンター・研究支援センター生命倫理室、室長
研究者番号：５０５４８５５０

伊藤高章　(Itou,Takaaki)
桃山学院大学・社会学部・教授